

総論

# 日本非開削技術協会の活動と展望

かねこ けんじ  
金子 謙二

(一社)日本非開削技術協会  
事務局長

## 1 はじめに

(一社)日本非開削技術協会 (Japan Society for Trenchless Technology : 以下、JSTT) は、電力、ガス、通信、上水道、下水道などの地下パイプライン設備の調査、設計、検査、維持・管理や地下埋設物、地下空洞などの把握など、非開削技術の普及、発展を通じて、広く社会公共の福祉の増進および安全で快適な社会環境の実現に寄与することを目的に1989年4月に設立された協会です。

JSTTが取り扱う非開削技術の中でも、推進技術は中核をなしており、協会の活動においても、日頃から(公社)日本推進技術協会(以下、貴協会)と密に連携をさせて頂きながら活動しています。

代表的な年間行事だけでも、毎年2月頃に開催している技術講習会、夏頃に開催している講演会、秋頃に開催している研究発表会などがあり、それぞれで共催・後援などのご支援を頂いています。

JSTTの活動の特徴としては、国際関連業務と工法ナビゲーションシステムの運営が挙げられます。

国際非開削技術協会 (International Society for Trenchless Technology : 以下、ISTT。本部：ロンドン) の日本側代表機関として、毎年開催される総会、発表会、展示会に出席・協力し、28の国と地域で加盟する協会との非開削技術の交流を行っております。

工法ナビゲーションシステムについては、2003年10月のプレサービス開始以降、約20年間、脈々と受け継がれており、毎日1000件を超えるアクセスと、年間で400件程度の情報照会を頂いています。システムとして円熟している部分もありますが、新たな工法や施工実績など、常に情報を更新しながら運営しており、貴協会からも委員派遣の支援を頂きながら活動しています。

さて本稿では、2022年のJSTTの活動を振り返りながら、今後の展望と期待を述べることにします。

## 2 2022年のJSTTの活動

2022年においても、新型コロナウイルス感染拡大の動静を見ながらの活動展開となりました。

1～3月頃の第6波、7～9月頃の第7波、そして本稿執筆時点(11月)では第8波の始まりと言われており、ピーク時の重症者数は減少傾向ではあるもの、新規感染者数としては東京五輪開催時期の第5波を継続的に上回り続けている状況です。

読者のみなさまも、ご自身が罹患したり、家族や職場同僚の罹患で濃厚接触者となるなど、さまざまな形で、対応を余儀なくされた経験のある方も多いのではないかと思います。

JSTTの行事運営においては、ほぼすべてにオンラインミーティング、ウェビナーを取り入れ、事務局内の業務

でもリモートワーク環境の整備、時差出勤対応などの対策を進めました。この結果、罹患者や濃厚接触者が発生しても、クラスターへの拡大を免れることができたと考えています。

距離の制約を受けず、遠方の方との打ち合わせを容易にするオンラインミーティングの浸透は、コロナ感染対策だけでなく、日本国内・海外の関係者とのコミュニケーションを可能にしました。

JSTTでは海外との会議開催の御膳立てや通訳業務のお手伝いをするような機会があり、新たな可能性を感じる場面もありました（写真-1）。



写真-1 海外技術者とのオンライン会議

オンラインミーティングは会議開催を容易にする一方、参加者同士のコミュニケーションが希薄になりやすいという課題も認識しているところです。そのような中で、オンラインと対面・参集を併用する方式で講演会を催したところ、申込みがオンライン参加に大きく偏る状況が見られました。第7波の初期に重なったこともあったため、やむを得ぬ状況ではありましたが、会員同士の交流の活性化を提供することも、JSTTの重要な役割と捉えており、今後の行事運営に工夫が必要と考えています。

コロナ対策において衝撃だったのは、昨年ヘルシンキ（フィンランド）において参集方式で開催されたISTTの総会・発表展示会（10月1日～5日）でした（写真-2）。その直前である9月19日に英国で執り行われたエリザベス女王の国葬では、日本から参列された天皇・皇后両陛下がマスク着用されるのか否かが話題になりましたが、フィンランドにおいてもマスクを着用する者はほとんどおらず、コロナ前と何ら変わらないと言って良いほど

の生活環境となっていました。

日本国内からの参加予定者においては、コロナ感染リスク回避のために海外渡航を断念し、数年間かけて準備された論文の発表を見合わせるといった状況もあった中で、国や地域によってコロナの対応が大きく異なることに衝撃を受けました。

唯一の正解はないのかもしれませんが、引き続き罹患対策に配慮しながら日常を取り戻し、協会の行事運営を進める段階に差し掛かりつつあると感じた1年でした。



写真-2 ISTT 総会の集合写真

### 3 今後の展望と期待

前項でふれたISTTの総会・発表展示会では、出席者・参加者との交流を通じ、アフターコロナにむけた活動が徐々に始まり、活性化しているような印象を受けました。

その中で、海外における技術課題の解決・事業展開において、日本企業を持つ推進工法技術の進出に期待する声、またはその逆で、日本市場への参入を目指す企業からの国内企業への取り次ぎを期待する声などがしばしば聞かれました。

現場周囲環境への配慮をしつつ、限られたスペースで緻密に工事を推進する技術を育てること、安定的かつ高い施工品質を維持することは、技術分野によらず我が国のお家芸とも言えるところですが、そのような観点から、日本企業による海外市場への参画、あるいは日本市場への海外技術の導入・改良といったことに期待されているようにも感じました。

またISTT会長は任期満了に伴う改選により、台北非開削技術協会（CTSTT）のAlbert Shou氏が就任し